

## 論説

### 網袋の揚げ方のジェンダー

——パプアニューギニア・アベラム社会における網袋の象徴世界——

新本 万里子

#### 1. 問題の所在

##### (1) 本論文の目的

ニューギニア島の内陸部では、農作業や子守りの道具として、手編みの網袋が広く使用されてきた。網袋は、日常生活を支える道具としてばかりではなく、人生儀礼の場でも使用された。男女両性の領域にまたがって使用されるため、パプアニューギニアにおける物質文化のなかでも、ジェンダーを分析する一つの指標として扱われてきた。

網袋を使用するパプアニューギニアの諸社会では、その揚げ方に男女差がみられたという。女性は網袋の紐を前頭部につけ、本体部分を背中に垂らして揚げ、男性は肩から揚げるのが一般的であった [MacKenzei1991:xvi]。しかし、近年では、女性も小型の袋を肩から揚げて携行している。文化人類学者のオハンロンは、「弾薬帯のように網袋を肩から揚げるのは、夫の役割を乗っ取ろうとする女性のサインである。涎かけのように網袋を首から揚げるのは、売春婦の印である」という東部高地州 (Eastern Highlands Province) に居住するワギ人 (the Wahgi) の女性の言葉を収集している [O'Hanlon1993:72]。東セピック州 (East Sepik Province) に居住するアベラム人 (the Abelam) の間では、「女は網袋を肩から揚げてはいけない」と男性から批判された時期があった。アベラム社会において、小型の網袋を肩から揚げる女性が出現したのは1960年代である。1980年代には前述の批判が下火になってきたということから、そのころまでには小型の網袋を肩から揚げるスタイルが一般化している [新本 2015:13]。現在、パプアニューギニアでは、ワギ人やアベラム人に限らず、女性が小型の網袋を肩から揚げる姿が一般化している。キリスト教の布教を背景とする経済的、社会的変化をパプ

アニューギニアの近代化とするならば、その過程で、網袋を肩から提げるといふスタイルが出現している。パプアニューギニアの女性たちが網袋を製作し使用する文脈において「近代」は、直接的には、外部社会から流入する物質を利用することによって網袋を製作することができるようになったことや、市場の出現によって村内だけではなく市場のある町に網袋を提げていくようになったという場の変化として経験されている。

本稿では、アベラム人の網袋を事例に、女性が網袋を頭から提げ、男性が肩から提げるといふ姿が何を象徴しているのかを明らかにすることを目的とする。男女による網袋の提げ方の違いに象徴されているものを明らかにすることによってジェンダーの関係を示し、女性が網袋を肩から提げ始めた当時、なぜ批判されたのかを理解することを目指す。

## (2) 網袋に関する先行研究

文化人類学者のマッケンジー (Maureen Anne MacKenzie) は、パプアニューギニアのテレホル人 (the Telefol) による網袋の製作と使用の過程の分析から、網袋に象徴される男女の関係を分析した。マッケンジーによれば、女性によって製作され、農作業や子守りの道具として用いられる網袋は、母親としての女性の役割や子どもを産むという生殖力を象徴している。女性が製作した網袋は男性に渡され、男性によって装飾が加えられる。男性は、装飾を加えた網袋を成人儀礼の場で使用する。階梯が上がるにしたがって、より装飾的な網袋が用いられる。第一義的に女性の生殖力を象徴する網袋は、男性によって装飾を加えられ使用されることによって、男性の社会的な生殖力をも象徴するものとなる [MacKenzie1991]。

マッケンジーによるこの分析は、アパデュライ (Arjun Appadurai) による「ものの社会生活」の分析方法と、ストラザーン (Marilyn Strathern) が明らかにしたメラネシア的な物質観を土台としている。アパデュライの「ものの社会生活」といふ分析手法は、「もの」が製作され、商品となり、使用され、廃棄されるまでに、いくつかの社会的状況を通していくことに注目している。社会的状況によって「もの」に付される価値が変化することから、その変化する価値とそれを生み出す状況間の政治を研究しようとするもので

ある [Appadurai 1986]。マッケンジーはこの分析方法に従って、女性の領域で製作され使用される網袋の意味と、それが男性に渡され、男性の領域で装飾を加えられ使用される過程での意味を分析し、テレホル人のジェンダーを論じたのである。

ストラザーンによるメラネシア的な物質観とは、単なる「もの」としてあるのではなく、携わった人の人格が重ねられた「もの」としてある。製作に携わった人の人格が次の人に渡っても保留され、さらに手を加えた人の人格が「もの」に重ねられていく [Strathern 1988]。マッケンジーは、テレホル人の網袋に象徴される男女の関係を、基本的な網袋の形を作り出した女性の人格が保留されたまま、さらに男性が装飾を加え使用することによって、男性の人格も重ねられていく「もの」として分析している [MacKenzie 1991]。

マッケンジーによる網袋の分析に刺激をうけて、ハウザーシュンプリン (Hauser-Shäublin) が、アベラム人 (the Abelam) の網袋の分析をしている。アベラム人も、テレホル人と同じように基本的な網袋を製作するのは女性である。しかし、その網袋にさらに男性が手を加えるということはない。アベラム人の場合は、女性たちによって網袋に編み込まれるのと同じデザインが、男性によって精霊堂に描かれる。精霊堂には祖先像が描かれ、その周囲の空白を埋めるように、網袋と同じデザインが描かれている。精霊堂に描かれたそのデザインは、網袋と同じ名称でよばれている。男性たちは精霊堂で成人儀礼を実施し、自分たちの社会の成人男性をつくりだす。女性が製作し使用する網袋は女性の生殖力を象徴しているが、その女性の生殖力を象徴するデザインを男性が用いることによって、精霊堂は男性の社会的な生殖力を象徴するものとなっている [Hauser-Shäublin 1996]。ハウザーシュンプリンは、網袋そのものに男性が手を加えることをしなくても、女性の生殖力が象徴されたデザイン、つまり子宮のモチーフを男性が描くことによって男性の人格を重ねていることを明らかにした。

アベラム社会において、精霊堂のデザインが網袋と同じ名称でよばれていることは、以前から文化人類学者によって注目されてきた。絵画の象徴分析を行ったフォージ (Anthony Forge) は、網袋のほか、子宮、精霊堂に描かれる絵画、精霊堂の中に並べて成人儀礼を実行するための部屋をつくる板が

同じ名称であると述べている [Forge1973:180]。また、アベラム人のジェンダー研究を行ったロッシェ (D. S. B. Losche) は、網袋と同じデザインが描かれた精霊堂を、女性の生殖力を意味するモチーフで飾られた男性であると解釈している [Losche1982:287]。先行研究では言及がないが、筆者による調査では、アベラム人男性が製作し使用する狩猟用の網と、成人儀礼の第二階梯の儀礼を受けた男性が口にくわえる装飾品も、網袋と同じ名称でよばれている。

ハウザー・シュンプリンが明らかにしたように、網袋そのものに男性が手を加えることがなくても子宮のモチーフを男性が用いる過程をも分析に含めることができるのだとすれば、網袋と精霊堂だけではなく、アベラム社会において同じ名称でよばれているものの全てを分析に含めることができるのではないだろうか。そうすることによって、網袋を男性が使用する文脈、男性が網袋を肩から掲げる文脈をも考察の対象に含めることができると考えられる。

女性たちが小型の網袋を肩から掲げるようになってから、特に都市部を中心に新しいデザインが考案され、そのデザインは、肩から掲げた網袋に編みこまれるようになった。伝統的な網袋が網目が緩く中身の見えるようなものだったのに対し、新しく考案されたデザインが編みこまれた網袋は、目の詰まった中身の見えない、近代的な都市生活に適応したものとして製作されている [Garnier 2009:17-23]。新しく考案されたデザインが編みこまれるのは、伝統的な価値観からは自由になった近代的な網袋である。

近代化の過程で、網袋の掲げ方が変化し、その掲げ方が批判された時代があるということは、ジェンダーに関する何らかの変化が生じていたと考えられるが、そこに焦点を当てた研究はない。掲げ方に象徴されていたと考えられる男女の役割を明らかにすることによって、網袋を通したジェンダー研究の空白を埋めることができると思われる。本稿では、調査地で網袋と同じ名称でよばれているものの全てを対象とする。マッケンジーとハウザー・シュンプリンの研究の基礎となったアパデュライの「ものの社会生活」の枠組みを使用し、ストラザーンが明らかにしたメラネシア的な物質観の視点から網袋と同じ名称でよばれているものに象徴されるものを解釈する。その上で、

網袋を掲げる男女それぞれの姿がどのような役割を象徴していたのか、ジェンダーの関係を明らかにする。

## 2. 調査地の概要と網袋

### (1) 調査地の略歴と分析の対象とする網袋

アベラム語には、サム語 (*samu kundi*)<sup>1)</sup>、カム語 (*kamu kundi*)、مام語 (*mamu kundi*) の3方言がある [Laycock 1965:25]。本稿で調査地とするのは、東セピック州マプリック地区N村 (N Village, Maprik District, East Sepik Province) である。N村の住民は、サム方言の話者である。東セピック州の北部海岸に州都ウェワクがあり (図1参照)、ウェワクから約120キロ西にマプリックという町がある。調査地のN村は、そのマプリック町の北東に接している。

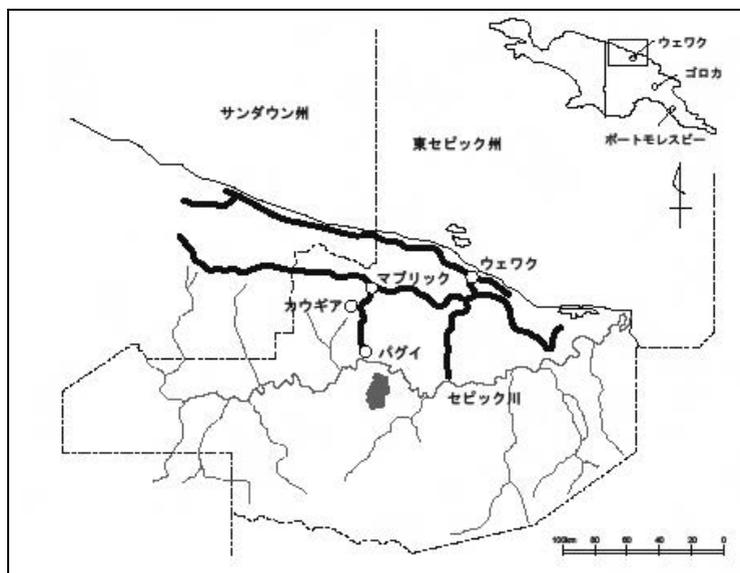


図1 東セピック州概略図

マプリック町には教会や学校、病院、商店、市場などがあり、N村の住民はしばしばマプリック町に出かけて行く。マプリック町の建築がオーストラリア植民地政府によって始められたのは、プリンス・アレキサンダー山脈に金鉱が発見された1930年代以降である。金鉱の発見によって鉱山関係者が入山し、彼らと一緒にカトリック・ミッションが入ってきた。1937年に、植民地政府の基地（administration post）が設置された。第二次世界大戦中は日本軍の侵攻によって植民地政府の統治が一時中断されるが、1948年には実質的な統治が再開される。政府の基地が置かれたマプリックは、ピーナッツやカカオ、コーヒー、米などの換金作物が1950年代から1970年代にかけて導入され、周辺地域に比べて経済的変化が加速した。

また、政府主導で市場が1960年代に導入され、それ以来N村の女性たちは、市場で嗜好品のビンロウやキンマの実<sup>2)</sup>、農産物などを販売し、現金収入を得るようになった。この市場での販売活動は、女性たちの主な収入源として現在まで続けられている。男性による収入が換金作物の収穫や日雇いの労働によったのに対し、女性による市場での換金作物の販売は、少額でも容易にアクセスできる収入源となった。網袋の素材が植物繊維から化学染料やアクリル糸、ナイロン糸などの工業製品に変化し、女性たちが網袋を肩から提げることになったという二つの変化は1960年代以降起こり、今日に至っている [新本2015]。

本稿では、1960年代以前から製作されてきた網袋を、N村に伝統的な網袋として分析の対象とする。そのため本稿では、とくに断らない限り、植物の繊維や染料を素材として製作されてきた網袋を対象としている。現在では植物の染料による染色は行われていない。染色に関して提示する資料は、高齢の女性からの聞き取りで得たものである。かつて、網袋は、男性の成人儀礼や女性の初潮儀礼でも使用されていた。N村で最後に成人儀礼が行われたのは、1964年である<sup>3)</sup>。成人儀礼の場で網袋がどのように使用されていたのかについては、高齢の男性に聞き取りを行った。N村で初潮儀礼が最後に行われたのは、2007年である。1980年代以降、しだいに初潮儀礼を受ける女性が減少した。筆者が観察できた2000年代には簡略化されており、初潮儀礼

で女性が網袋を提げて盛装することはなかった。初潮儀礼における網袋の使用については、高齢の女性に聞き取りを行った。

## (2) 生業と性と網袋

N村の人びとは、ヤムイモを中心的な作物とする焼畑農耕を生業基盤とし、ヤシ科植物のサゴヤシ<sup>4)</sup>の澱粉採取も補助的に行っている。この焼畑農耕とサゴヤシの澱粉採取をめぐる、月経と性行為の禁忌が発達している。焼畑で栽培される農作物と乳児は、どちらも網袋で運搬される。ここでは、焼畑農耕において月経と性行為がどのように忌避されているのかを提示しておきたい。

N村で栽培される作物のうちヤムイモは、大きく二つの種類に分かれている。アベラム語でワピ (*waapi*) という長く成長する性質のヤムイモと、カ (*ka*) という短く丸く成長する性質のヤムイモである<sup>5)</sup>。

主にワピ種を栽培するワピ畑 (*wapi yaawi*) は、初潮以降の女性は入ることができないとされており、男性だけで栽培が行われる。ワピ畑で生産されるヤムイモの中でも、もっともこの社会で重要と考えられているのは、マンブタップ (*maambutap*) というヤムイモである。男性さえも、畑でマンブタップが育っている間は性行為をもつてはいけないという。性行為をもった人の体からはジョワイー (*jowaai*) という蒸気とも匂いともつかないものが醸し出され、互いに毛穴からジョワイーを取り込む。もしも、性行為をもった男性がワピ畑に入れば、マンブタップはジョワイーの匂いを嗅いで、台無しになってしまうという。マンブタップがうまく育たなかった年は、その他の焼畑の作物もうまく育たないとされる。マンブタップは現在でも展示儀礼で大きさが競われるが、かつては交換儀礼も発達しており、交換パートナーよりも大きなマンブタップを贈ることが男性の威信の源泉だった。

主にカ種のヤムイモが栽培される畑では、初潮以降の女性も作業をする。ただし、月経期間の女性は、カ畑に入ってはいけない。その他、作物の栽培を祈る石が安置された建物が広場に面して立っており、女性はその建物に入ることは禁じられている。女性が建物の中に入った場合には、豚を捧げないかぎり死んでしまうと考えられている。

以上のように、農作業において月経や性行為が忌避されている。その農作業で栽培される作物と、性行為によってできる子どもの両方が網袋で運搬されている。

### 3. N村の網袋の製作と使用

#### (1) 女性による網袋の製作

アベラム語で、網袋はウット (*wut*) という。表 1 は、N 村において筆者がウットとききとったもののすべてを示している。女性の体内の子宮のほか、女性が製作する網袋や男性が製作する狩猟用の網、成人儀礼の場で使用されるものがウットとよばれている。詳しくは後述するが、子宮に胎児が入るほか、網袋には乳児が入れられる。成人儀礼において男児から大人の男性に再生するためには、精霊堂の中に入る。狩猟用の網に人間が入ることはないが、動物が入りやがて殺されることが、胎児の死と関連付けて考えられている。生と死、再生にかかわる網、あるいは袋が、ウットの原義ではないかと推測する。

女性が製作する網袋は、用途や大きさによって種類がある。女性たちは、子どものころから母親のそばに座り、遊びながら網袋の製作を覚えてきたという。母親を代表に、オバや姉妹など身近な年長の女性から、植物の採取から網袋を編み上げるまでの一連の作業を教わってきた。現在 50 代後半以上の年配の男性には、網袋を編めるという男性も少数ながら存在する。彼らによれば、子どもの頃に母親の傍に座って母親が網袋を編むのをみているうちに、網袋の編み方を覚えてしまったという。

植物繊維製の網袋は、指で編んだ網目の大きなものである。一本の糸を絡めて編むネットィングの技術で編まれている。いずれの種類も網袋も編み方は同じで、口の部分が小さく底部が大きい形をしている (写真 1 参照)。用途によって大きさが異なる。

カル・ウット (*kal wut*) とは、男性が肩から提げて携行する小型の網袋である。嗜好品のピンロウの実やキンマの実のほか、呪術に使用する道具もカル・ウットに入れて携行された。首から提げて胸部に垂らすこともあった。マンジュ・ウット (*manjē wut*) とは、女性たちが頭から提げ、編みかけの網袋

表1 N村でウットとよばれる「もの」

製作者	名称	アベラム語	用途など	使用者	携行の仕方
	ウット	<i>wut</i>	(子宮)	(女性)	
女性	カル・ウット	<i>kaɪ wut</i>	ビンロウの実などの嗜好品、呪術の道具などを携行する網袋	男性	肩から提げる・首から提げて胸部に垂らす
	マンジュ・ウット	<i>manjɛ wut</i>	編みかけの網袋、嗜好品などを携行する小型の網袋	女性	頭から提げる
	ジャンバ・ウット	<i>jamba wut</i>	ヤムイモ、タロイモ、バナナ、葉物野菜などの農作物を運搬する中型の網袋	女性	頭から提げる
	クワ・ウット	<i>kwa wut</i>	子どもを運搬する中型の網袋（子どもが歩けるようになると、ジャンバ・ウットとして農作業に使用）	女性	頭から提げる
	グラ・ウット	<i>gɛla wut</i>	ヤムイモ、薪を運搬する大型の網袋	女性	頭から提げる
男性	ウット	<i>wut</i>	子宮のモチーフ（精霊堂、精霊堂の中に並べられる板、祖先像に描かれる）	男性	
	ウット	<i>wut</i>	成人儀礼を受ける男性が入る部屋とするために、精霊堂の中に並べられる板	男性	
	カラ・ウット	<i>kaɾɛ wut</i>	成人儀礼の第2階梯を終えた男性が、盛装のために口にくわえる装飾品	男性	口にくわえて胸部に垂らす
	バル・ウット	<i>baɾɛ wut</i>	豚を捕獲するのに用いられる網	男性	肩から提げる
	イエンプ・ウット	<i>yɛmbu wut</i>	ワラビーを捕獲するのに用いられる網	男性	肩から提げる
	アンブ・ウット	<i>ambu wut</i>	バンディクトを捕獲するのに用いられる網	男性	肩から提げる
	ピリング・ウット	<i>piling wut</i>	鳥を捕獲するのに用いられる網	男性	肩から提げる

や嗜好品を入れていた小型の網袋である。1960年代以降、女性たちが肩から提げるようになった網袋とはこのマンジュ・ウットのことであり、現在は、嗜好品のほか現金、携帯電話などが入れられている。ジャンバ・ウット (*jamba wut*) とは、女性が、ヤムイモやタロイモ、バナナ、葉物野菜などの運搬に用いる網袋である。前頭部に網袋の紐をかけ、背中に背負うようにして運搬する。クワ・ウット (*kwa wut*) とは、子どもを入れて運搬するための網袋である。クワ・ウットは、子どもが大きくなり必要なくなると、ジャンバ・ウットとして使用される。グラ・ウット (*gɛla wut*) とは、ヤムイモや薪、水などを運ぶ大型の網袋である。なお、マンジュ・ウットのマンジュ (*maanjɛ*) とは「糸」を意味している。後述するように、マンジュ (*maanjɛ*) は、精霊堂に描く絵画の「線」をも意味している<sup>6)</sup>。ジャンバ・ウットのジャンバ (*jamba*) とは「飾る」、クワ・ウットのクワ (*kwa*) とは「眠る」、グラ・

ウットのグラ (*gēla*) とは「大きい」ことを意味している。

N村では、網袋の材料として、アベラム語でニヤムイ (*nyaamēny*)、イパ (*ipa*)、セブ (*sēpē*) という3種類の植物が用いられてきた<sup>7)</sup>。それぞれ、植物を切り倒して、樹皮の内側の繊維を採取する。その繊維を撚って糸とする。イパとセブの繊維は生成り色で、染料に染まりやすいという性質がある。それに対しニヤムイは染まりにくく、イパとセブよりも白く柔らかい。そのため、イパとセブは、染色せずに農作業用の網袋の素材として用いられただけではなく、染色して糸糸としても用いられた。ニヤムイは、染色せずに白糸として用いられた。とくに染色したイパやセブと組み合わせる用い、デザインのコントラストを際立たせたい網袋に用いられた。

染色には二つの方法があったという。一つの方法は、樹木の種子や実、シヨウガ科の植物の根など<sup>8)</sup>を、糸に直接擦りつけるという方法で行われていた。この方法で、赤、黒、黄の三色の染色ができた。糸に直接擦りつけるだけの作業であり、誰でも見て真似ることのできる作業であった。もう一つの方法は、染料となる数種類の植物の葉や皮を、糸となる植物繊維と一緒に土器に入れて煮出すという方法だった<sup>9)</sup>。この方法で、赤色に染色することができた。土器での染色は女性たちの秘密の作業で、植物の採取や染色の作業を男性に見られたり、作業中に男性から声をかけられたりすれば、うまく染まらないと考えられていた。

日常、農作業や子守りに用いた網袋は、染色していないイパやセブで編みただけの、無地の網袋がほとんどだったという。無地の網袋は、「白い網袋 (*wama wut*)」と呼ばれている。その他、二、三本の平行する線や市松模様のような単純なデザインの網袋が、農作業や子守りには使用されていたという。これに対し、初潮儀礼で用いる網袋には、サーニン (*saanim*) という複雑なデザインが編みこまれていた。サーニンは、赤と黒の縞模様のような三角形が連続して横に並んだデザインである (写真1参照)。写真2のように数本の糸を平行させて編み進め、交差させてデザインをつくる。この技術で編まれたデザインそのものをサーニンという (写真2参照)。

指で編まれた網袋は、網目が大きく緩く編まれている。その伸縮性が子官に似ているといわれ、網目の揃って美しい伸縮性のある網袋が「良い網袋



写真 1 サーニンのデザインのジャンバ・ウット 植物繊維製・化学染料で染色（2003年9月筆者撮影）



写真 2 サーニンのデザインの製作（2003年8月筆者撮影）

(*yékén wut*)」とされる。「子どもがお腹にいるときにはこのウツ (子宮) にいるけれども、生まれたらこのウツ (網袋) に入れる」といいながら、女性たちは自分のお腹と網袋を指さすように、子宮と網袋の類似性は認識されている。子どもは、男性の精液と女性の膣の分泌液ででき、子宮の中で子は女性の血液で育つと考えられている。乳児は母乳で育つが、母乳は母の血液と同じものだと考えられている。

## (2) 女性による網袋の使用

本節では、網袋の使用の仕方を、女性のライフ・ステージに沿って述べていく。

女性は、子どもの頃から網袋の紐を前頭部にかけて、背中側に背負うようにして提げる。子どもは、小さな「白い網袋」を提げていたという。大きくなるにしたがって、しだいに大きな網袋を提げた。少女は、母親の傍にいて、畑仕事や水汲みなど母親の仕事を覚えるべきだとされる。

初潮がくると、少女は母親から月経小屋に連れていかれた。母親は娘に月経処置を教え、食物禁忌を課した。水を飲むことや水分のある野菜を食べること、動物の肉を食べることなど、「冷たい (*gëmbis*)」と考えられている食物をとることが禁じられた<sup>10)</sup>。食べても良いのは、炉の火で焼いたイモ類やイモ類のスープだけだった。少女を月経小屋に残し、広場では初潮儀礼が行われた。女性たちの間で半分に分かれたココナッツが交換され、マンブタップが切り分けられて集まった人びとに配られる。そして、切り分けられていない一本丸ごとのマンブタップが、母方オジに贈与される。中でも娘の成長に貢献した母方オジには、マンブタップのほか貝貨も贈与される。娘の面倒をみてくれたことに対する礼である。

月経小屋にいる少女は、これまでの子どもっぽい振る舞いをやめて、重い網袋を提げることができる強い女性にならなければいけないと諭された。初潮が終わると、少女は体を洗われ、髪の毛を剃られて、貝のネックレスやブレスレットなどの装身具をつけ、網袋を頭から提げて外にでてきた。その網袋は、サーニンのデザインが編みこまれた新しい網袋である。中には、白い貝が沢山入っていた。サーニンのデザインの網袋と装身具をつけている間は

静かにしていなければならないとされ、母親と一緒に畑に行っても、畑の縁にビンロウの仏炎苞<sup>11</sup>を敷いて、その上に座っていなければならないかった。この間は、食物禁忌も続けられた。2度目、3度目の月経がきた時に少しずつ装身具がはずされ、食物禁忌もしだいに軽減された。

日常に戻ると、網袋も、無地や単純なデザインのものに戻された。その網袋を使い、女性たちは畑仕事をした。初潮以降の女性には、様々な禁忌が課されている。前述したように、初潮以降、女性たちはワピ畑には入ることができない。さらに、月経期間には月経小屋にいなければならない、「広場に近づいてはならない」「料理小屋に入ってはならない」「畑に入ってはならない」「男性に食物を渡してはならない」などの禁忌が課されていた。これらの禁忌を破れば、作物は台無しになってしまうと考えられている。

子どもができると、女性たちはクワ・ウットを編み始める。母親など、周囲の女性からクワ・ウットをもらうこともあった。子どもが生まれると、女性たちはクワ・ウットに子どもを入れて運搬する。女性たちは毎日のように畑に行き、その日の作業の終わりにイモ類や野菜を収穫して、ジャンバ・ウットに入れて集落まで持ち帰る。持ち帰った食料を料理して子や夫に食べさせ、夫の親族にも気前よく食事を振る舞わなければならない。親族総出で行うカ畑でのヤムイモ掘りでは、掘り出した大量のヤムイモの運搬にグラ・ウットが用いられる。

### (3) 男性による狩猟用の網の製作と精霊堂の建築

男児も女児も、幼児のころは母親の「女の家」で生活しているが、男児は10歳ぐらいになると父親が生活する建物に移り、父親と生活をともにするようになった。男児は父親とともに畑や狩猟に出かけ、父親の仕事を覚えることが期待される。狩猟用の網の作り方も、父親から習ったという。網袋を編める男性が少数ながら存在するのに対して、狩猟用の網を編める女性は、筆者が調べた限り存在しない。

豚を捕獲するためのバル・ウット (*balé wut*)、有袋類のワラビーを捕獲するためのイェンブ・ウット (*yěmbu wut*)、げっ歯類のバンディクットを捕獲するためのアンブ・ウット (*ambu wut*)、鳥を捕獲するためのピリング・ウ

ット (*piling wut*) があつた。このうち、現在でも使用されているのは、アンブ・ウットのみである。狩猟用の網は、ユブット (*yévéé*) という植物か、ペヌ (*penu*) という植物の繊維を使って編まれている<sup>12)</sup>。植物を切り倒し、その内皮が用いられる。染色せずに用いられる。結び目を作りながら編むという手法で、網袋とは異なる編み方で編まれている。伸縮性が大事だと語られることはない。

精霊堂の建築は、作業を指示する年長の男性を中心に行われた。若者たちは、木材の選択や柱の立て方、屋根の葺き方、絵画の描き方など、精霊堂建築のすべての行程を年長の男性から習った。柱を立て屋根を葺いてから、精霊堂の正面部分が作られる。正面の下部は、サゴヤシの葉で編んだマットを壁とする。この壁は、クインベ (*kuimbe*) とよばれている (写真3参照)。その上部は、サゴヤシの葉鞘を平らに開いて縫い合わせ、絵画を描いたものが壁とされる。そのサゴヤシの葉鞘を縫い合わせたものに、男たちは絵画を描く。使用する絵の具には、赤色、白色、黄色の粘土が使用される。また、黒色として、炉の炭が利用される。祖先 (*gwaal*) の絵を数体横に並べて描き、その周辺の空間を埋め尽くすように、三角形のデザインが描かれている (写真4参照 写真4では、サーニンサニンのデザインが三角形で表現されたうえに、網袋そのものも描きこまれている)。その三角形のデザインを、人びとはサーニンと同じものだという。しかし、精霊堂に描かれたそのデザインを、人々はサーニンとはよばずにウットとよぶ。このウットを描く「線」が、前述したようにマンジュ (*maanjë*) とよばれている。精霊堂を建築している間、その建築に携わっている男性は、性行為をもってはいけない。性行為をもつと、精霊堂建築は成功しないと考えられている。

成人儀礼では、精霊堂の中にサゴヤシの葉鞘に絵画を描いた板が並べられる。その板で仕切った小部屋の中で、儀礼を受ける若者に、秘密の笛や祖先像が開示される。板に描かれる絵画は、精霊堂の前面に描かれる絵画と同じように、祖先の絵とウットのデザインである。描かれたデザインだけではなく、板自体がウットとよばれている。さらに、儀礼を受ける若者に開示される祖先像の体にも、ウットのデザインが充填されている。また、第二階梯の秘密を開示された男性は体を黒く塗られ、頭飾りをつけ、口にはカラ・ウツ



写真3 精霊堂の正面下部（クインベ (*kuimbe*)）  
（2015年7月29日筆者撮影 N村から直線距離で約5キロ北西の村にて）



写真4 精霊堂の正面上部（祖先像の絵の周囲を埋めるウットのデザイン）  
（2015年7月29日筆者撮影 N村から直線距離で約5キロ北西の村にて）

ト (*karë wut*) という装身具をくわえて聴衆の前に登場する。カラ・ウットはユブットで編まれ、豚の牙と貝貨が付けられている。これらの成人儀礼の場で使用される「もの」は、男性だけで森の中で製作される。製作期間中は、性行為が忌避されている。

#### (4) 男性による狩猟用の網、精霊堂、網袋の使用

男性は、子どものころから網袋を肩から斜め掛けにしたり、紐を首にかけて胸の前に垂らしたりして運搬した。網袋は母が編んでくれた。最初の網袋は小さな「白い網袋」で、体が大きくなるにしたがって網袋も大きくされた。

男児は、農作業や狩猟、建物の作り方も父親から教わる。農作物や動物、木材の運搬には肩を用いる。木材のように長いものは担ぎ、タロイモや丸く短いヤムイモはサゴヤシの葉鞘に入れてまとめて担ぐ。マンブタップのように長いヤムイモや豚などの獲物は、丸太などに結わえつけて、丸太の前後を二人の男性で担いで運搬する。子どもも肩に乗せて運ぶ。狩猟に行くときには、狩猟用の網を肩に担いで運搬する。網袋に限らず、男性の運搬スタイルは肩を使う。

男性が狩猟用の網で捉える動物は、貴重なタンパク源である。しかし、妻の妊娠初期には、狩猟用網を使用してはいけない。その期間に狩猟をすると、狩猟用の網に動物がかかるように子どもが子宮に絡まってしまう難産になり、子どもが死んでしまうと考えられている。同様に、男性がナイフを使って農作業をしたり、木材など重い荷物を運んだりすれば、子どもが死んでしまうと考えられている。妊娠初期だけではなく、子どもの出生前後にも同じ禁忌が見られ、男性は炉のそばに座って静かにしている。また、子どもが歩き、自分で食物をつかみ食べることができるようになるまで、夫婦は性行為をもたない。次の子ができると、先に生まれた子が死んでしまうと考えられている。

N村の男性は、アラ (*ara*) という組織に属している。アラは二つのカテゴリーから成り、男性はどちらか一方のカテゴリーに属している。一方のカテゴリーの男性が成人儀礼を受けるときには、もう一方のカテゴリーの男性が成人儀礼の準備を行い、成人儀礼を実施する。成人儀礼の実施期間も、男性

は性行為をもってはいけない。

男児には、7才から10才前後で第一階梯の成人儀礼が行われた。第二階梯の成人儀礼は、口髭が生えるころの男性に対して行われる。10代後半から20代前半ぐらいの男性である。第二階梯の成人儀礼は、精霊堂の中への2、3か月にも及ぶ隔離期間がともなった。この間、若者には、初潮をむかえた女性と同じように、「冷たい」ものを食べてはいけないという食物禁忌が課される。父親のマンブタツプの交換パートナーの男性からヤマイモのスープを与えられ、体を大きくすることが期待される。精霊堂の中で過ごしている間に、男性が行うべき様々な仕事が教えられ、秘密の笛が開示される。この秘密を開示された男性は、前述したように体を炭で黒塗りし、頭飾りやネックレスなどをつけ、カラ・ウツをくわえて登場したという。

第三階梯は、子どもを一人か、二人もったころの男性に対して行われたという。男性は、この頃からマンブタツプの栽培を始める。第三階梯の秘密を知った男性は、マンブタツプの栽培に必要な呪術的な力をもっていると考えられている。第二階梯までの男性の網袋が単純なデザインのものだったのに対し、第三階梯に達した男性は、サーニンのデザインの網袋を肩から提げた。この後、日常的にサーニンのデザインの網袋を提げることができた。

さらに、第四階梯の秘密である祖先像を開示された男性は、マンブタツプ栽培で指導的な役割を果たす。彼らが使用する呪術は、もっとも恐れられている。呪術を用いて、子どもや女性を殺すこともできたという。この階梯に達した男性も、サーニンのデザインの網袋を日常的に肩から提げた。また、すべての秘密を知った者として、サゴヤンで編んだバスケットを肩から提げたという。このバスケットはクインベ (*kuimbe*) とよばれ、その素材とデザインは、精霊堂の下部の壁をつくる素材とデザインと同じである。精霊堂の壁と同じものだと、N村の住民自身が説明する。なお、男性が第三階梯以上に達すると、その男性の妻も、日常的にサーニンのデザインの網袋を頭から提げることができたという。

以上の成人儀礼の各階梯では、ペニス切開も伴っている。イラクサでペニスをたたき、竹で切開を行う。切開で失う血は、「女の血」、あるいは「母の血」と考えられている。成人儀礼の場でばかりではなく、日常的にも、体が

重く感じるときや、農作業がはかどらないとき、木材が重く感じられるときなどに、ペニス切開をするという。「女の血」をぬくと体が軽くなり、皮膚が輝くという。「女の血」は「冷たい」と考えられている。一方、男性がマンブタツの栽培や成人儀礼で用いる呪術的な力は、火を用いるなど熱さに関係している。呪術的な力を発揮するために、マンブタツの栽培においても成人儀礼においても性行為が忌避されている。

### (5) 精霊堂の新築式

精霊堂が新築されると、その新築の儀礼が行われる。精霊堂をたてた村だけではなく、その周辺の村々から人びとが集まり、精霊堂が披露される。精霊堂前面のサゴヤシの葉の壁の部分には、貝貨を数珠つなぎにつないだものが何本も掲げられる。貝貨は、精霊堂を新築した村の人びとが準備したものだけではなく、周辺の村々から集まった人びとが持ち寄ったものも掲げられている。その上部の屋根には、祖先像とウツが描かれた部分を囲むように、サーニンのデザインが編みこまれた新しい網袋が掲げられる。精霊堂の屋根に葺いたばかりのサゴヤシの葉は濃い緑色だが、その葉が枯れて茶色になるまで、毎晩のようにダンスが行われるという。

新築式が行われている間、性行為の禁忌はない。また、新築の間は、女性も精霊堂に入ることができる。女性はサーニンのデザインの網袋を頭から掲げ、男性は肩から掲げてダンスを踊る。新築式が終わると、精霊堂は女人禁制となる。

## 5. 考察と結論

以上の資料から、本節では、網袋をはじめウツとよばれる「もの」の製作と使用の過程を通して、何が象徴されているのかを見ていく。

まず、ウツとよばれるもののなかで、人間の製作ではない生得的なものとして子宮がある。子宮と網袋の類似性は認識されていた。子どもは男性の精液と女性の膣の分泌液からできるが、子宮の中で子は女性の血液で育つと考えられている。さらに、網袋に入っている乳児期には母乳で育つ。歩けるようになり網袋に入らなくても生活できるようになると、農産物などの食物

で育つ。女性が頭から掲げた網袋の中に入っているものは、彼女たちが産み育てた子と生産した農作物である。

子や農作物の運搬など日常的な場面だけではなく、初潮儀礼でも女性は網袋を頭から掲げている。初潮をむかえた女性には、重い網袋を掲げることができるほどの強い女性になることが諭されている。網袋を女性たちが頭から掲げる姿が象徴していたものは、母親としての女性の役割である。

網袋に象徴されるのは、月経や出産などの女性の生殖力である。その生殖力を得たばかりの時期に、サーニンのデザインの網袋が使用されている。月経や出産は社会の存続にとって必要なものであり、初潮儀礼を行うように喜ばれるものである一方で、マンブタップの栽培や成人儀礼の実行など、男性の生産するものには危険なものともみなされている。

男性のウットの製作に目をうつすと、成人儀礼の場となる精霊堂やその中に並べて部屋を構成する板、祖先像、口にくわえる装身具の製作などは、いずれも性行為を避けて行われている。成人儀礼の第一階梯に達した男児は、母親との同居生活から父親との同居生活にうつり、成人儀礼の各階梯にはペニス切開がともなっている。「女の血」あるいは「母の血」を抜くことと、男性の秘密を開示されることで男性になっていく。第三階梯以上の男性は呪術的な力をもっており、とくに第四階梯に達した男性の呪術は強いと考えられている。男性は、呪術的な力を使って、マンブタップを生産し、精霊堂を作り、成人儀礼を実行する。精霊堂や精霊堂に並べる板は、男性の社会的な子宮だと解釈できる。

呪術は、作物を生産し成人男性をつくりだす一方で、女性たちから恐れられている。子どもが多いと妬まれ子どもを殺されてしまう、禁忌を守らないと殺されてしまうと女性たちから恐れられている。女性の月経が男性の生産するものに対して危険な反面、男性の呪術的な力は、女性の産み出すものに危険だという関係がある。狩猟用の網は、呪術的な力をもつ男性が作ったものだからこそ、女性の妊娠初期や出産前後には、子どもを殺してしまうことが恐れられている。子宮と網袋については伸縮性が重要なこととされ、「冷たい」「湿った」状態を見出すことができるのに対し、成人儀礼の場となる精霊堂や板と、狩猟用の網には、それらの状態を見出すことができない。とくに、

精霊堂と板の製作は性行為を避けて行われており、「冷たい」状態になることが避けられている。

男性が肩から提げるカル・ウットには、呪術の道具が入っている。月経が出産に必要なように、呪術は男性の生産に必要なものである。男性が網袋を肩から提げたスタイルが象徴しているのは、そうした男性の社会的な生殖力である。

サーニンのデザインの網袋は初潮儀礼と成人儀礼で使われ、男女のライフ・ステージを表すものになっている。第三階梯以上の男性が提げる網袋のデザインがサーニンであることは、サーニンのデザインが、第一義的に女性の生殖力を示しながら、社会的な男性の生殖力をも示すものであることを示している。第三階梯以上の男性の妻もサーニンのデザインの網袋を提げることができるのは、月経期間や性の禁忌を守り、男性の生産に協力的な「良い女 (*yékén taakwa*)」であるからである。第四階梯の男性は、精霊堂そのものといってもよいようなバスケットを肩から提げる。女性が頭から網袋を提げる姿は母親としての女性の役割を、男性が肩から網袋を提げる姿は、男性が社会的な生殖力を持った者であることを示している。

マッケンジーがテレホル人の網袋を通して明らかにしたジェンダーの関係や、ハウザー—シュンプリングがアベラム社会において、子宮、網袋、精霊堂の関係に焦点をあてて行った研究で示したジェンダーの関係と同様の関係を、アベラム人がウットとよぶもの全てを視野に入れた場合にも見出すことができる。本稿では、アベラム人の網袋に関わる先行研究の知見に加えて、網袋を提げるスタイルが象徴していた男女それぞれの役割を明らかにすることができた。

筆者は、アベラム社会において、「女は網袋を肩から提げてはいけない」という批判が 1960 年代からはじまり 1980 年代には下火になったことから、1980 年代にはこのスタイルが一般化したと考えている [新本 2015]。同時期、市場で販売されるようになった化学染料に触発されて、女性たちはサーニンのデザインを日常使用する網袋に編みこむようになり、それを提げて市場に行った [新本 2015]。これ以前、日常的にサーニンのデザインが編み込まれた網袋を提げることができたのは、成人儀礼で上位階梯に達した男性と

その妻である。若い女性たちが肩から網袋を掲げ始めた当初は、そのようなスタイルで広場を横切ろうものなら、広場に座っている年長の男性に批判されたという。女性が網袋を頭から掲げた姿が母親としての役割を示し、男性が肩から網袋を掲げた姿が社会的な生殖力をもつ者であることを示していたからこそ、女性がサーニンのデザインの網袋を肩から掲げていく姿は、男性にとっては、母親としての役割を果たさない、自分たちの社会関係から外れていく女性の姿に見えたのだと考えられる。女性たちは、市場で、少額でもアクセスのしやすい、コンスタントな収入源を持つようになった。市場のある町は、近隣の村々や異なる言語集団の男性と出会うことのできる場でもあった。村内で網袋を肩から掲げる姿を批判されても、若い女性たちは、美しいサーニンのデザインが編み込まれた網袋を肩から掲げて、町へ行くようになったのだと考えられる。

## 謝辞

本稿は、広島大学大学院社会科学研究所に提出し、平成 23 年 3 月に受理された博士論文「パプアニューギニア・アベラム社会のジェンダーと親族関係の動態に関する民族誌的研究」の第 2 章「網袋からみる社会関係」を改稿したものである。博士論文指導教員の高谷紀夫教授、佐野真理子教授、三木直大教授と、本稿の匿名の査読者にお礼申し上げます。なお、網袋の材料となった植物については、科学研究費補助金 2624405316 基盤研究 (A)「アジア地域における布工芸品の生産・流通・消費をめぐる文化人類学的研究」(代表 岡山大学・中谷文美教授)による研究費によって、同定のため追加調査を行った。

## 注

- 1) アベラム語は、イタリック体で表記する。なお、アベラム語には、二重母音の aa がある。単語が単体で発音される場合は aa と二重母音となるが、その単語の後に修飾される別の単語が接続される場合には、a と短く発音される。本稿では、二重母音の単語を単体で記述するときには aa、別の単語を接続して記述するときには a と書き分ける。

- 2) ビンロウの学名は *Areca catechu L.*、英名は Betel Nut Palm である。  
 キンマの学名は *Piper betle L.*、英名は Chinese Betel である [Corner & 渡辺 1969]。
- 3) 最後の成人儀礼が実施された年を、1964 年だと記憶している老人が多い。  
 成人儀礼の衰退の背景には、キリスト教の布教と経済的変化がある。1964 年の数年後にも成人儀礼を実施しようという機運が高まったことがあるが、儀礼の準備期間に村の男性が亡くなり、儀礼は中止になった。その後は実施されることがないまま、今日に至っている。
- 4) サゴヤシ属 *Matroxylon* の植物。
- 5) ワビの学名は *Dioscorea Alata*、カノ学名は *Dioscorea Esculenta* である。コーパイエが作成した表によれば、N村で栽培されているワビは、アベラム語で 23 種に細分される。カは、41 種に細分される [Coupaye 2013: 36-38]。
- 6) マンジュ (*maanjë*) という言葉は、「糸」と「線」のほか、「我々」をも意味している。
- 7) ニヤムイの学名は *Phaleria macrocarpa*(Scheff.) Boerl. (*Thymelaeaceae*)、イパの学名は *Abroma angusta*(L.)L.f. (*Malvaceae*)である。ニヤムイとイパの同定は、高知県立牧野植物園による。セプはクワ科植物だが、学名は不明である。
- 8) アベラム語でスクグル (*sëkë gëlë*)、ワインバミスク (*waimba mi sëkë*) という木の実は、ターヌ (*taanë*) というショウガ科の植物の根が用いられる。スクグルのスク (*sëkë*) は実、グル (*gëlë*) は黒を意味する。黒色に染色できる。学名は *Dendrocnide cordata* (Warb. ex H.J.P.Winkle) Chew (*Urticaceae*)である。ワインバミスクのワインバ (*waimba*) は赤、ミ (*mi*) は木、スク (*sëkë*) は実、種子を意味する。赤色に染色できる。学名は *Bixa orellana L.* (*Bixaceae*)である。ターヌ (*taanë*) は黄を意味する。黄色に染色できる。学名は *Curcuma xanthorrhiza Naves* (*Zingiberaceae*)である。学名の同定は、高知県立牧野植物園による。
- 9) アベラム語でアカケ (*akake*) ほか、数種類の植物の名前を聞き取っているが、アカケ以外は収集できていない。人口増加と換金作物の畑の拡大

のために、染色に使われていた植物の生える森が後退している。聞き取りをしたのが高齢の女性であり、現在、植物が生えている森まで行くことはできないとのことであった。アカケの学名は *Muxuna bennettii* F.Muell. (*Fabaceae*)である。学名の同定は、高知県立牧野植物園による。

- 10) 「冷たい (*gëmbis*)」という民俗概念は、出産をめぐる文脈でしばしば現れる。グンビス (*gëmbis*) という単語は、「冷たい」だけではなく、「湿っている」ことをも指す。たとえば、避妊に関する民俗知識が火を使用し、ある植物を煮出して女性にその煮汁を飲ませ、煮出した後の植物を竹筒につめて炉の煙の当たる軒下に差し込み、乾かしておくのに対し、再び妊娠することを望むならば、その竹筒の中の乾燥したものを、川や泉の水に浸さなければならない。水は冷たく湿っている。「冷たい」「湿っている」という状態が自然と備わっているのに対し、「熱い」「乾いた」状態は自ずとあるというよりも、火を使ったり禁忌を守ったりして目指すべき状態である。
- 11) 仏炎苞とは、ヤシ科植物の実を包むように成長する羽状の葉である。
- 12) ユブット (*yëvë*) の学名は *Gnetum gnemon* L. (*Gnetaceae*)である。学名の同定は、高知県立牧野植物園による。ペヌ (*penu*) は未収集で同定できていない。

## 参考文献

Appadurai, Arjun

1986 Introduction: Commodities and the politics of value. Appadurai, Arjun (ed.) *The social life of things: Commodities in cultural perspective*. Cambridge University Press. pp. 3-63.

Corner, E.J.H & 渡辺清彦

1969 『図説熱帯植物集成』東京：廣川書店

Coupaye, Ludovic

2013 Growing Artefacts, Displaying Relationships: Yams, Art and Technology amongst the Nyamikum Abelam of Papua New Guinea. Berghahn.

- Forge, Anthony  
1973 *Style and Meaning in Sepik Art*. Forge, Anthony (ed.) *Primitive Art and Society*. London and New York. pp.169-192.
- Garnier, Nicolas  
2009 *Twisting Knowledge and Emotions Modern Bilums of Papua New Guinea*. Port Moresby : University of Papua New Guinea.
- Hauzer-Schäublin  
1996 “The Thrill of the Line, the String, and the Frond, or Why the Abelam are a non-cloth Culture.” *Oceania* 67(2):81-106.
- Laycock, D.C.  
1965 *The Ndu Language Family (Sepik District, New Guinea)*. Canberra: The Australian National University.
- Losche, Diane Sara Brady  
1982 *Male and Female in Abelam Society : Opposition and Complementarity*. Columbia University.
- MacKenzie, Moureen Anne  
1991 *Androgynous Object: String Bags and Gender in Central New Guinea*. Harwood Academic Publishers.
- O’Hanlon, Michael  
1993 *Paradise: Portraying the New Guinea Highlands*. London : British Museum Press.
- Strathern, Malilyn  
1988 *The Gender of the Gift: problems with Women and Problems with Society in Melanesia*. University of California Press.
- 新本万里子  
2015 『『女が肩から網袋を提げる』ということーパプアニューギニア・アベラム社会のジェンダーの変化』『アジア社会文化研究』第16号、1-24頁。

mariko19@hiroshima-u.ac.jp